



Case Report

やわぴた 凹凸のある腹壁に有効だった症例

キーワード

やわらかい凸面、変化に対応する装具、テープが一体
違和感の少ない凸面形状

はじめに



東京慈恵会医科大学附属病院
皮膚・排泄ケア認定看護師

二宮 友子

1989年に金沢大学医療技術短期大学部看護学科卒業後、東京慈恵会医科大学附属病院に勤務。1998年に皮膚・排泄ケア認定看護師取得。病棟主任、外来師長を経て、2006年より皮膚・排泄ケア認定看護師として専従業務に従事。

当院は1075床を有する特定機能病院で、ストーマ造設数は年間80～90件。高齢者の造設が増えていると感じるが、実際の患者平均年齢は65歳とこの3年間変化がない。これは、高齢者も増える一方で、40～50代の患者も増加している事から、平均年齢に変化が出ない傾向にある。

働き盛りの年齢から高齢独居や認知症に至るまで、患者層は広がる一方、近年では、多種多様のストーマ装具があり選択肢も広がった。しかし、患者の腹壁によっては、平面型装具で対応したい部分と凸面型装具で対応したい部分が混在するような場合がある。今回、やわらかい凸を有する装具の経験を通じ、このニーズを満たせる可能性を感じたので紹介する。

症例：55歳女性

既往歴	小腸癌に対し、小腸切除を過去2回施行。
現病歴	小腸癌再発によるイレウス。3週間の腸管安静でもイレウスが改善せず、手術となる。 空腸部分切除(1.5m)+横行結腸ループストーマ造設術施行。追加治療として、化学療法を予定している。
家族背景	夫と二人暮らし。
ADL	自立。
ストーマケア	セルフケア実施。
ストーマサイズ	35×40×20mm(術後25日目)

ストーマ装具選択の実際

横行結腸ストーマであったが、術前3週間の絶食と小腸切除の影響から、流動食開始から1500ml/日の水様便が続いた。さらに縫合不全を危惧する発熱があり、食止めになる等、術後3週間は単品系平型の小腸用ストーマ装具に用手形成皮膚保護剤を併せて使用し、交換間隔は72時間であった。その後食事が常食となり、排泄物が軟便となった事で、キャップ式排泄口では対応困難となり、装具を見直す事となった。

腹壁には過去2回の小腸がんによる手術の瘢痕があり、体重も減少し皮下脂肪が柔らかくなった事で、立位では皮膚の下垂による皺が目立つ状態であった(写真1)。ストーマ自体は高さがあり、ストーマ近接部にはストーマに連結する皺はなかった。しかし、ストーマ12時方向の腹壁は隆起し、6時方向は低いといった凹凸を伴った腹壁の特徴があった(写真2)。この時点でセルフケアは確立しており、患者は交換間隔の延長を希望していた。

単品系平面型装具を安定して貼布できていたが、交換間隔を延長する為に、①耐久性のある面板であること、②腹壁の隆起部と凹む部分に対応でき密着すること、③下部開放型であることを考慮し、やわらかい凸を有する外周テープ付のやわびたお好みカット55mmを選択した。やわらかい凸面により近接部の密着が高まることを期待し、用手形成皮膚保護剤を使用せずケアをよりシンプルにした。

やわびたを貼布し96時間経過した状態(写真3)は、面板は膨潤しているが、範囲は10mmで12時方向と6時方向も均一に膨潤していた(*写真3の付着した便は、剥離後ビニール袋に破棄した際に付着)。外周テープ部も、瘢痕の皺によく追従している(写真4)。患者からは、「装着の違和感が少なく、フィルムが透明で見やすく、1日延長できるのがいい。」との言葉があった。



写真1



写真2

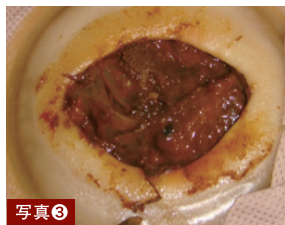


写真3



写真4

考察

腹壁に凹凸がある場合、硬い凸面型装具を使用すると、隆起した部分に密着せず浮いてしまうことをしばしば経験する。それを防ぐために、患者は外周にサージカルテープで補強し始める。患者によっては思いがけないテープを選択し、皮膚障害が発生することもあり、テープを貼る手間もかかる。しかし、やわびたはテープが一体となり簡便な方法で高い密着を得られている。

また、ストーマの高さがある場合は平面装具で良いとされ、今回のケースも平面装具と用手形成皮膚保護剤の併用で安全に貼布できていた。しかし変更後は、やわらかい凸面のみでも同様の密着が得られる。これらの事からやわびたは、装具ひとつで、面板全体の密着と近接部の補強を兼ねたケアが可能と考える。

まとめ

今回、凹凸のある腹壁に、外周テープ付のやわらかい凸面型装具を使用し、安定した貼布が得られるという事を経験した。また、耐久性の高いフレックスウェア皮膚保護剤により装着期間が延び、ランニングコストを抑えられたことも良かった。

このケースのように療養期間が長い患者は、その過程で体重の変化をきたしやすく、腹壁の形状や皺の変化が生じることをしばしば経験する。その際にも、凸面と平面の両者の良い特徴を兼ね備えるやわびたでは、造設後の患者本人の身体状況およびストーマや腹壁の様々な変化に装具自体が対応できるのではないかと期待している。ケア変更や装具変更する機会が減り、長期間、同じ装具で対応でき、患者の負担を減らすことができるのではないかと考えた。